

リカードの労働価値論：彼の絶対価値の性格に関連して

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

46

(号 / Number)

2・3

(開始ページ / Start Page)

195

(終了ページ / End Page)

225

(発行年 / Year)

1978-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008371>

リカードの労働価値論

——彼の絶対価値の性格に関連して——

平 林 千 牧

目 次

- 一 はじめに
- 二 『原理』の労働価値論に関連して
- 三 「遺稿」における絶対価値
- 四 結 語

一 はじめに

D・リカードは、彼の名著『経済学および課税の原理』（以下、「原理」と略称、またとくに表示しないさい）にはその第三版である）で、A・スミスの投下労働価値論——「労働こそは最初の本源的購買貨幣である」とする見地——を援用し、かつまた「交換価値の本源的源泉をどのように正確に規定したアダム・スミス」(*Principles of Political*

Economy, The Works, Vol. I, p. 14. 雄松堂書店「リカード全集」I、一六ページ。以下、*Principles* とのみ表記)と評価し、そこから周知のスマス二面的価値規定の批判的克服へと向かったのであった。このリカードのスマス批判の見地は、すでに幾度も論じられてきたように、リカードの『原理』の性格決定に重要な意味をもったのであるが、そしてまたその性格は、いわば『原理』の論理的コンテクストに歴然と表明されてもいるわけであるが、同時にその背後にあるリカードの資本主義把握の或る時代的表象と不可分の関係にあったもののように思われる。もちろん、リカードにあっては、この時代的表象は彼自身の諸論考において必ずしも明示的に表出されているわけではない。彼はその学問的営為という意味で純粹な経済学者であったと言えよう。しかし、彼がスマスを受容しかつまた、のちのマルクスの批判を受け、しかもそのマルクスにも重要な刻印を残したという点において、やはり、リカードの内なる或る時代的表象を考慮しなければならないように思われる。とはいえ、ここでは、リカードの時代的表象つまり思想的性格をそれ自体として考察しようとするわけではない。ここでは、スマス・リカード・マルクスという関係においてそうした性格をかなり象徴的に把握しようものと思われる「絶対価値」「不変の価値尺度」論を手掛りとして描出しようとするものである。

ところで、リカードがスマスの労働価値論つまり「本源的購買貨幣」としてのそれを継承し、彼の体系において相対価値の決定の原理として一貫せしめようとしたさいに、マルクスによって、スマスの価値規定における「深いところに根拠のある」問題の所在を「見のがし、正当に評価せず、それゆえ解決もしなかった」(*Theorien über den Mehrwert*, MEW, Bd. 26-1, S. 42. 国民文庫(1)、一〇〇ページ。以下、*Mehrwert* とのみ表記)との周知の批判を受けたのであった。⁽¹⁾このマルクスの批判の意図は明瞭であって、要するに、スマスの第一篇第五章の世界Ⅱ商業社会と第六章以降の三階級社会との差異の、すなわち前者と剰余価値の発生を必然化せざるをえない後者の階級的社会関係と

の区別の問題であつた。ところが、このマルクスのリカード批判は、実はリカードに対して若干酷なものであつて、リカードからすれば、まさにスマスは「交換価値の本源の源泉をあのように正確に規定した」はずであるのもかかわらず、という疑問のうちに、事実上彼なりの「問題の所在」を提起していたのである。しかも、そこには、前述の第五章と第六章との関係が介在しており、すでに明らかなように、「原理」の第一章、第二章では、彼はその点についてはっきり言及してもいるわけである。

しかし、このリカードの「問題の所在」の解決の方向は、明らかにマルクスのそれとは、完全には言えないまでも、ほぼ逆になつていた。⁽²⁾簡単に比較すれば、マルクスのそれは前述の区別による三階級社会の独自性の明確化に向けられていたが、リカードのそれは、むしろその区別の解消による三階級社会の普遍化に向けられていた。したがって、リカードの場合、問題は、スマスの「正確な規定」に基づけば、必然的に彼の右のような社会設定にならざるをえないとされたことにある。それゆえ、彼は、必ずしもスマスの「矛盾」を無視したわけではなく、むしろ、ある意味では——つまり古典派的枠内では——スマスに即して問題を設定しようとしていたのだとも言いうる。

いうまでもなく、ひとたびスマスの「本源的購買貨幣」としての労働価値論に立脚しようとするならば、結果として、マルクスの批判に晒らざるをえない。だが、彼は、それを——つまりスマスの「矛盾」を——ただ「事実を確認すること満足」(a. a. O., MEW, Bd. 26-2, S. 469, 国民文庫⑤)、三〇五ページ)してそうしたわけではなかつた。マルクスの指摘のように、彼はまさに自己の「研究全体を貫いているやり方」(a. a. O., S. 397, 国民文庫⑤)、三〇一ページ)として、スマス労働価値論を取り上げたのであつた。もちろん、前述の指摘と同様に、マルクスとのいわば方向の違いはあるのであつて、確かに彼の「原理」の理論的处理は、ただもつばらスマスを「正確に規

「定」したものと想定しているだけである。そのため、彼はその「正確な規定」から生ずる理論的無理を確認せざるをえないことになった。そして、この点からすれば、リカードの理論的営為は、その「原理」的枠内では、「正確な規定」としてのスミス投下労働価値論を出発点として、再度そこへ立ち戻らざるをえなかったものである。その意味では——マルクスには研究素材上言及することはまったく無理であったが——、原理的考察としては、彼は結果的にはスミスの価値規定の二面性を否応なしに確定せざるをえなかったのである。

ところで、リカードが陥った困難は、明らかに、スミスの労働価値論に刻印されている時代的表象である。それは、ごく大ざっぱに言えば、自然法的・啓蒙的思想に基づくものであるし、また、それを特殊イギリス的に示したものはその伝統的労働価値論の形成あるいはすぐれて経済学的求心力によるものであっただろう。端的に言えば、イギリス的自由主義とは、すぐれて経済的自由主義でありえたものであり、そういうものとしてもっとも人間の自然の本質を経済的性格に帰着させうるものであった。スミスのホモ・エコノミクスはまさにその点を明らかにしている。こうした自然法的思想は、他のドイツ的あるいはフランス的種差との対比で見れば、そのもの自体として、すでにイギリスにおける先進的な商品経済の発展との対応をみないわけにはいかないのは当然である。したがって、こうした関係では、ことの当否はともかく、つまり自然法的世界↓商品経済世界の発展からみれば、イギリスにおける経済学の発展をとりもなおさず人間社会の自然的「原理」の解明に帰着させるものであった。

こうした社会把握は、個人と社会とのあるいは人間の本質と社会的本質との Identitas を確立しうるものとの想定にたっており、またそれを可能にしうるかのように、社会の経済過程は商品経済の発展として旧来の人間の紐帯の解体と再編とをおしすすめた。それゆえ、社会認識のプロセスとしては、各理論的展開のつまり学説発展のプロセスとしても、そうした Identitas の解明の整合性を発展させるところに基本的コンテクストがあったと言

いうであらう。もちろん、こうした理論的作業は、明らかに、現実そのものに含まれる契機に依拠したわけだが——つまり旧来の共同的人間紐帯の解体と商品経済的個人の形成・拡大という社会的な傾向を個人の本質的契機とするということだが——、しかしその拡大の歴史的本質と必ずしも一致するものでもなかった。

つまり、これらの作業はいわゆる市民社会認識というかたちで表象され、そのかぎりで見実の歴史的發展の契機に全面的に依存し、かつ個人＝社会の同一性の理論を形成してきた。ところが、あくまでも歴史的發展のある契機に依存し、それなりの統一的理論を形成したとはいえ、それらの理論もそれ自体として十分な首尾一貫性を確立しえたわけではなく、それぞれの理論が「市民社会」としての表象の根拠とした契機の差異とともに、その契機もつ限界性を、同時に理論そのものの限界あるいは究極の統一性の欠如として表わさざるをえなくしたのである。

すなわち、右のような点を、先きほどのマルクスのスミス、リカード批判に関連させてみれば、リカードに比べてすぐれて思想的人物であったスミスにとっては社会はまず市民社会（商業社会）として認識され、そしてそれは理論的に現実の三階級社会とのずれを——マルクスの表現すれば「裂け目」を——必然的に含まざるをえないのであった。ところが、リカードにおいては、必ずしも対象認識において直接的にそうした市民社会的認識と三階級社会のそれとのずれを現出させるような理論展開を与えるものとはなっていない。というよりも、すでに言及したように、彼にとつて、そもそも問題は、すでに述べてきたこととの関係でみれば、スミスの「裂け目」つまり市民社会的表象と三階級社会的関係とのずれの克服なのであって、後者の現実を包摂し³⁾尽すことであつた。したがって、スミスに対するリカードの位置は、スミスの自然法的表象を三階級社会論の前面に押しだし、自己の理論によってその妥当性を検討しようとする性格をもつのであり、そのかぎりでは、リカードをただちに「A・スミスの矛盾の内的な理由になつてゐる問題をけつして解決したわけではない」(a. a. O., S. 399. 国民文庫(5)、三〇四頁

ジ)ときめつけうるものではないと言えよう。

古典派経済学という枠からすれば、むしろリカードこそスミスの「矛盾」に関して困難な立場にあったと言える。つまり、彼は、彼の三階級社会論によって、自然法的・古典派的表象としてのスミス労働価値論(投下労働価値論)の有効性を明らかにしなければならなかったのである。こうしたことは、事実上は多かれ少なかれリカード経済学に関してすでに言及されてきたとはいえ、必ずしも彼のスミスに対する関係として考慮され、明確化されたわけではなかった。スミス労働価値論のリカードによる継承は、リカードの三階級社会論の論理的欠陥それ自体だけのことでなく、その欠陥が根ざした労働価値論のスミスの性格¹⁾自然法的性格に左右される関係にあったものであり、リカードがそうした自然法的表象の世界と無縁ではなかったことを彼に刻印するものであった。もちろん、その刻印自体は、リカードの場合では、彼の経済学の範囲内の問題である。そこで、以下では、主に彼の絶対価値・不変の価値尺度論との関係で、リカードにおけるスミスの世界の一面を論じることとしたい。

(1) 一般に、その学説史的手法がどうであれ、スミス、リカードのようなイギリス古典派経済学の最良の成果を考察し、彼らをもつたる対象として研究を進めたマルクスとの関係が考慮される場合には、すでに多かれ少なかれスミス・リカード・マルクスにおける経済学上の位置の確定やその理論的性格規定が学説史的枠内で検討されることになっている。しかし、そのさい、スミスやマルクスが思想的にも独自の地位・性格を有していたということを考慮すると、リカードは他面ではなほだ座りの悪い地位にあるように思われる。この点は、例えば次のような事情すなわちマルクスのリカード批判が一面でスミスを手掛りとしていること、また他面では、スミスの「非常に素朴に、絶えまない矛盾のなかで動揺している研究」、つまり「一面では、彼は、経済学的諸範疇の内的関連をすなわちブルジョアの経済体制の隠れた構造を、追求する。他面では、彼は、これとやらんで、競争の諸現象のうちに外観的に与えられているとおりの関連を、したがってまた、実際にブルジョアの生産過程にとらわれてそれに利害関係を有する人とまったく同様な非科学的な観察者に対して現われるとおりの関連を、併置している」研究に対するリカードの評価、つまり「労働時間による価値の規定」を「ブルジョア体制の生理学の基礎、出発点」とし、この基

礎が「ブルジョア社会の内的関連つまり真実の生理学の土台またはその出発点をなすところの基礎に、そもそもどこまで適合するかということ、すなわちこの体制の外観上の運動と真実の運動とのあいだの矛盾はそもそもどんな事情にあるか」を考察した「この科学に対するリカードの偉大な歴史的意義」(以上、Mehner, MEW, Bd. 26-2, S. 162-63. 国民文庫(4)、二八九—九一ページ)とされていることから伺い知ることができる。さらにまた、「経済学批判」としてのマルクスの理論体系の成立において、すでに指摘されているような古典派的労働価値論の残滓を考慮するならば、スミスやマルクスに独自の思想的観点と考えられるものとの関係で、リカードの理論体系の根本的性格の十分な解明が必要とされることになるのではないかと思われる。

(2) リカードとマルクスにおけるスミス批判の方向は、一面では全く逆のようでありながら、他面では一部で両者のスミス批判に重なり合う部分が生じている。その点は、明らかにマルクスの『資本論』における労働価値論の論証方法にかかわることであるが、ここでは、すでに指摘した彼のリカード批判の「見地すなわちスミスの「裂け目」に関する評価に通ずるマルクスの労働価値論の性格を考慮しておけばよいであろう。(なお、より詳しくは、拙稿「経済学批判体系」の「考察」(同)、『経済志林』第四三巻第四号、一九七五年二月、所収、を参照されたい。)そして、この両者に重なり合う部分の背後では、明らかにスミスが介在していたはずであって、まさにそれだからこそ、前述のようなマルクスのスミス評価によるリカード批判をも結果的には可能であるとされたのであろう。なおまた、こうした点でスミス、マルクスにおける対象把握の思想的・理論的関連の微妙な性格、相互関係については、時永淑「スミスとマルクスにおける二重の社会像」(『経済志林』第四四巻第四号、一九七六年二月、所収)をぜひ参照されたい。

(3) リカードのスミスにおける二面的価値規定の批判が同時に『諸国民の富』第一篇第五章と第六章との関係の彼なりの理論的克服をも意味したことは、周知のように、「原理」第一章第一節および第二章の冒頭の叙述から明らかなことである。このような「原理」の体系構成上の要点があるからこそ、マルクスをして次のようなリカード評価も成立させているのであり、彼のスミス評価からするリカード批判の観点に関してやはり考慮されるべき点であろうと思われる。すなわち、「この二つの章〔原理〕第一章、第二章」は、従来の経済学に対する彼の全批判を、深遠な考察方法と通俗的な考察方法というA・スミスの一貫した矛盾との確定的な訣別を含んでおり、そして、この批判を通じて同時に、幾つかのまったく新たな驚くべき結論を生みだしている。このことから、このはじめの二つの章が与える高度の理論的楽しみが出てくる。というのは、この二つの章

は、くだくだと長たらしく迷いこんでいる老人(スミス)に対する批判をきわめて簡潔に示し、またばらばらで雑多な諸現象のうちから精髓を統一的に引き出し、ブルジョア経済体制全体を一つの基礎的法則に従うものとして叙述しているからである」(Mehruert, MEW, Bd. 26-2, S. 166. 国民文庫(4)、一九五一年九六ページ)と。

また、マルクスのリカード評価によるスミス批判の見地は、次のようにも示されている。「確かに、アダム(・スミス)は、商品の価値を、それに含まれている労働時間によって規定しているのだが、そのあとでこの価値規定の現実性をアダム以前の時代にまで押し戻してしまふのである。言い換えれば、彼にとつて単純商品の立場では真実だと思われたことが、単純商品にかわつて、資本、賃労働、地代などの最も高度で複雑な諸形態が登場するやいなや、明確でなくなるのである。」(Zur Kritik der Politischen Ökonomie, MEW, Bd. 13, S. 44. 大内力他訳、岩波文庫版、六七一六八ページ)なお、マルクスのスミスリカード評価のこつとした交錯の問題に関して、前掲、時永論文、三八ページを参照されたい。

(4) 「分業論としての価値論、それはかのアダム・スミスが古典的な一面性すなわち市民的視野の固定性において展開したものであるが、いまこの「批判」においてマルクスは、それを歴史的反省において批判的に継承するのである。文字通り歴史的批判において理論的に継承するのである。」(平田清明「五〇年代マルクスの市民社会論」、岩波書店、経済学史学会編「資本論」の成立、一九六七年、所収、二六六ページ)。

すでに言及したマルクスのスミス、リカード評価との関連からすれば、おそらくリカードは再度座り心地の悪い存在とならなければならぬ。果たして、右のようなマルクスによるスミスの批判的継承がありえるものとするなら、スミス労働価値論の批判的継承者としてのリカードは、まったく非スミスのであったということになるのであろうか、あるいはまたマルクスのリカード評価はスミスに対して無縁のものとされることになるのであろうか。

二 『原理』の労働価値論に関連して

リカードによって『原理』で想定された社会が三階級社会をなし、かつまたその三階級社会は、人類の自然的経済過程としてのみ描かれていることも疑いない。すでに述べたように、リカードにとってのスミスの意義は、

「交換価値の本源の源泉をどのように正確に決定した」ことにあり、かつまた、その「源泉」はただ単に社会の「初期の状態」のみならず、「いっそうの進歩が果たされ技術と商業が繁栄している社会の状態」についても絶対的に妥当する「原理」として認められるべきものであった。それゆえ、この「原理」は「猟師の弓と矢」「漁師の丸木舟と漁具」による生産の状態であろうと、「綿花を運搬する船舶の建造」や「紡績工と織布工」(以上 *Principles* p. 24-26. 「全集」I、二八一—三〇ページ)が登場する生産の状態であろうと貫徹する性格のものである。こうして、リカードの「原理」の三階級社会は、いわば人類史に普遍的に根拠を置く人間労働Ⅱスミスの投下労働価値論と結びつけられこれと不可分の関係で自然的な社会状態とされている。もっとも、こうしたリカードのいわば社会像とも言うべき「原理」の社会設定は、ごく自明のものだといふべきであろう。すでに、彼自身が「序」文中において、「社会の異なった段階において、地代・利潤および賃銀という名称のもとに、これらの階級それぞれに割に当てられるべき大地の生産物の割合は、本質的に異なるであろう……」(*Op. cit.*, p. 5. 同前訳、五ページ)と述べていたのであり、したがって彼にとつて、「社会の異なった段階」が単に各階級に対する「割り当て」分の割合の相違としてしか意味しないものであることは自明の前提であった。

スミスとの関連およびそこから生じた彼の右のような社会像の成立の必然性からすれば、すでに明白に指摘されてきたように、彼が「原理」で価値論として考察されるべき事柄を「交換価値……を左右する法則」としたこともまた必然的であった。すなわち、彼にとつて、投下労働とは、そもそも、「猟師の一日の労働の所産」であるとか、または、一〇人の一日の労働の所産 (*Op. cit.*, p. 26-27. 同前訳、三〇ページ)、というように理解されているのであり、結局価値形成的労働を、そのものとして自然に働らきかける労働一般に見出し、したがって、その労働の社会的在り方を三階級社会とするものとなっているのである。それゆえ、彼は、そうした何人かのまた何日かの労働の所産

が一般的に交換価値として価値量的に現実に売買される基準こそを問題にすることとなった。そのさい、スマス批判との関係からすれば、とうぜんすでに「ストックの蓄積」をそこに導入せざるをえなかったわけであるから、過去の「蓄積された労働」が登場してくるのであって、そのこと自体スマスの投下労働価値論の性格とはまったく異質であったわけではない。社会という枠組みと結びつく労働としては、労働一般が価値形成的労働であるということ¹⁾で解決されれば、まず問題はなかったのである。

もちろん、労働一般を価値形成的労働とするという場合、リカードにおいても、その労働実体が「原理」の考察でまったく直接的考察の対象とならないということではなかった。周知の「原理」第一章第二節における「異なった質の労働」に対する考察で、労働の「熟練と強度」に言及しつつ、事実上「絶対価値」としての価値形成的労働の性格の一面に言及することになっている。だが、ここで彼がほぼスマスと同様の仕方²⁾で、その問題を解決したことは、象徴的であるが、彼の投下労働価値論がいかにスマスのそれに結びついているかを示している。とはいえ、この「絶対価値」への考察において、彼がまったく独自の見地を示さなかったというわけではない。というよりは、多少誇大に表現すれば、そこは、彼が『原理』の第三節以降で、スマスの「裂け目」を埋めるべく展開する議論を、いわばリカード的に「ストックの蓄積」との関係で平仄のとれた労働価値論を説くための細工として論じている箇所ともみなしうる。というのは、彼はそこで二つの問題を、すなわち「市場」を媒介とする「価値の等級」が「適当な位置に調整され、配置され」る関係と、「ある時のある種の労働」と「他の時の同種の労働」つまり「異なった時期における同一商品の価値」の比較との問題を検討しているからである。前者はリカードの問題意識からするスマス支配労働価値論の排除とでもいえるべき関係であるが、これが「価値の等級」として処理されているところにやはりイギリスに伝統的にかつスマスに通じる彼の労働価値論の理解がある。この場合、労働は、いわば本源

的価値形成労働として自然に相対するものであって、そのかぎりでは労働一般の次元にある。しかし、それは三階級社会の編成の一部として、したがって相対価値として価値量的に現象する根元であって、その根元が認められれば、労働の「等級」としての在り方は価値形成能力の差異としては、結局量的に比較されるものにすぎないのである。なぜなら、後者では、ある時間の経過によって、ある、「等級」の労働の価値形成能力に変化が起これば、「この原因に比例した効果が、その商品の相対価値に生みだされる」(Op. cit., p. 21. 同前訳、二四ページ)ことになるにすぎないからである。⁽²⁾

こうして、リカードは、スミスに比較すればやや強引な仕方でも労働価値論の展開のなかに価値形成的労働の三階級社会における実体的在り方——彼としては、単純労働一般としては抽象しえない労働の具体的在り方に規制された限界においてであるが——を確認している。そして、それがいわば「空間的編成」としての「等級」的な存在としても、「時間的過程」としての「等級」別労働の価値形成能力の変化としても、相対価値の考察にたいし、その労働の価値形成的要因としての処理が可能であるとしたのである。したがって、結局ここでは、「ある時のある種の労働」による一定時間の投下労働による商品価値の形成と「他の時の同種の労働」による投下労働量の変化との比較として、したがって絶対価値の変化として、彼の労働価値論が実質的に論じられているのである。⁽³⁾そして、おそらく彼の意図からすれば、ここで提出された「ある時」と「他の時」とを結びつける関係が、彼の理解する労働と「資本」との関係にほかならなかつたと思われる。

スミスが『諸国民の富』で社会の経済的編成を二様に存在するものごとくに説いたのは、一方では当時の支配的な自然法的思想による社会の抽象像の想定方法に影響されていたためであろう。しかしまた他方では、そうした抽象像の要請が商品経済の発展による個人の創出に根拠をもつものであった。そして、この後者は、他ならぬ多か

れ少なかれ資本関係の生成を起動力として可能であったわけで、彼にとつて、そうした思想的社會認識の現實的帰結が理論的に明らかにされねばならなかった。それゆえ、彼の二様の社會編制の設定——つまりマルクスの言う「裂け目」——は、言い換えれば、自然法的な人間—社會の本源の在り方とそれに即する現實の在り方との叙述方法として展開されたとみられる。リカードはこうしたスミスの対象把握の性格を適確に理解していたわけではない。だが、すでに言及したように、スミス労働價值論（投下労働價值論）の繼承は、不可避的に彼をしてスミスの社會認識の裝置を追認させることになった。

『原理』の展開は、相對價值—絶對價值としての労働の本源の價值形成的性格を明らかにしたのち、第三節以降で周知の資本の蓄積による價值論の一貫性を追求している。この『原理』の展開は、スミス批判としてのコンテクストにあるものと言つてよいし、一般的にそうしたものとして承認されていることである。ところが、ほかならぬこのスミス批判の理論的コンテクストこそ、同時にリカードをして、彼の社會設定の一面化にもかかわらず、いわば價值論の理論構成を二段化させ、そうしたかたちでスミスを追認させる結果をもたらしたのではないかと思われるのである。

すなわち、この点はより詳細には後述することであるが、周知のように、リカードにおいては資本は基本的には過去の蓄積された労働として登場するのであるが、この過去の労働は現實的には、固定と流動の資本區別を有するが、「耐久性の程度」の問題として實質的には資本の回転時間に対応する價值の移転と回収として商品の價值形成に加わる仕組みになっている。それゆえ、端的に示せば、絶對價值・相對價值關係としての労働の價值形成的性格の解明と、過去の労働の價值形成要因の資本回転に規制される側面との二段化のうちに、價值論としての原理的考察が与えられていることになるのである。そして、この二段化こそ、一方では彼をしていわゆる價值修正論を生ぜ

しめた要因であり、他方ではそれと不可分の関係で彼を悩ませることとなった「不変の価値尺度」論の問題として論じられる原因となったものである。⁽⁴⁾

ところで、右の二つの問題のうち、前者の価値修正論についてはすでに多々論じられてきたことであり、またそれ自体を考察することは本稿の範囲外のことである。ただ右の二者の論点との関係で若干言及しておけば、留意されるべきことは、次のようなことであろう。すなわち、スミスーリカードにおいて、価値形成的労働が社会の経済的基礎過程の「本源的」「絶対」的根拠とされたことは、——とりわけマルクスとの対比で表わせば——、商品経済の転倒的性格の把握を無視し、したがってそれ自身を人間社会の自然的本質として把握することであった。それゆえ、彼らとりわけリカードにあっては、そうした本質を根拠とし始源とする理論形成において、商品経済の特殊の性格の解明に成功することは当然困難であった。つまり、価値の形態や資本の流通形態としての運動形式において、空間的・時間的な商品経済の社会編制の契機が確立され、それによってはじめて価値形成的労働を根拠とする法的規制が明らかにされるといふことにはなりえなかった。むしろ、こうした方法とは逆になっているところに彼らの特徴があったわけで、その点でもリカードでは修正論は必然であった。⁽⁵⁾そしてまた当然のことながら、この点でリカードはスミスとの関連ではいっそう徹底していた。スミスでは、三階級社会の登場とともに、いわばおのずと投下労働価値論が背後に退りぞき支配労働価値論が前面に出されるといふ仕組みになっている。これは、経済的基礎過程の抽象とそれに基づく社会の三階級編制とが実質上区分され、なおそのかぎりて理論的関連が与えられうるとしたものである。リカードでは、最早そうした差異はなく、労働の価値形成的把握に直ちに三階級の社会編制が結びつけられている。このようにいわば相違の解消のうえで、かの労働本質と三階級編制との二面を説くことになれば、修正論は不可避であった。

右のような修正論の設定の必然性は、もちろん前述の後者の問題すなわち「不変の価値尺度」の想定と不可分の関係にある。つまり、彼の「絶対価値」としての労働の価値形成的性格を普遍的なものとする理解に根拠をもつものである。とはいえ、彼の不変の価値尺度にたいする考え方は、そのもの自体としてはかならずしも明快なものとなつてはいない。この点は、彼とスミスとの関係でみれば、なおいっそうそのような印象をうける。スミスでは、周知のように、「それ自体の価値がけつして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによつてあらゆる商品の価値が評価され、また比較されうる、究極のしかも実質的な標準である」として、きわめて明確な確信が与えられている。もちろん、彼の場合でも、「たとえ労働がいっさいの商品の交換価値の実質的尺度であつても、商品の価値が通常評価されるのはそれによつてではない」（以上「*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Vol. I, Ed., R. H. Campbell & A. S. Skinner. p. 47 and 48. 大内兵衛・松川七郎訳『諸國民の富』I、岩波書店一〇五および一〇六ページ）とされ、労働それ自体が現実的な価値尺度として現われるものとはされていない。しかし、スミスでは、こうしたマルクスのいわゆる「内在的尺度」「外在的尺度」との関係とも言うべき問題になんらかの理論的苦難は見られない。⁽⁶⁾

他方、リカードでは、こうした関係の考察に重大な困難が伴っていた。そのさい、スミスとの対比で言えば、「外在的尺度」論に関しては、彼は理論的に比較的手際よく処置しているようである。しかし、彼のそうした処理は、あくまでも、他方の「内在的尺度」との関係をいわば切断したうえでのことであつて、必ずしも十分納得的に処理されえたものではないであらう。⁽⁷⁾そして、この点は、もう一方の「内在的尺度」に関する彼の理解に密接な関連があつたわけであり、またこの後者こそ、彼の商品の価値の実体としての労働把握から生ぜざるをえない困難に由来するものであつた。

(1) もちろん、リカードのこうした三階級社会の想定とリカードが資本と労働を根幹とする経済編制の想定は自然史的とはいえず、その理論的な展開からすれば、スミスのいわゆる市民社会の想定による対象把握の性格と非常に異なっている。スミスでは、市民社会は自然的自由の制度として、人間に本来的でありそれゆえ個々の労働は他人の労働と本源的に *identical* を確立しようであった。したがって、スミスにとっては、三階級社会の現象は——マルクスの「通俗的な解明」という批判的観点から成ししようとも——いわばそうした安定的な社会観に支えられている。おそらく、リカードにおいては、そうした表象が直接成し立っているわけではなく、それは彼のスミス評価という意味でたんにスミスに通じているにすぎないのである。とはいえず、リカードのこうしたスミスへの依存が考慮されなければならないはずだと思われる。

(2) リカードが「原理」第一章第三節でその「耐久性」を等しいものとして取り上げている蓄積された労働としての資本は、例えば「弓と矢」や「船舶・建物・機械」はそれ自体として商品経済的社会編制を担いうるものではない。この点は、スミスが分業編成としての労働を説いているのと大きな相違であろう。しかし、他面、まさにそのためにリカードにあっては、スミスの労働価値論に依存したかぎり、彼に必要な——つまり相対価値を決定する「原理」として必要な——労働の社会的編制に言及しなければならなかった。確かに、彼は「実質価値」または「絶対価値」を非常にしばしば忘れて、ただ「相対価値」または「比較価値」だけに固執している」(Meinert, MEW, Bd. 26-2, S. 169, 同前訳④、三〇二ページ)のである。だが、第二節での絶対価値への考察は、第三節以降のために不可欠であったろうし、それは、彼が、後述する遺稿とは異なり、スミスに対する関係として第三節を相対価値の決定の原理に関し基本的規定として論じていることから明らかであろう。

(3) もちろん、リカードは、第二節において周知のように、「私が読者の注意を求めようと望んでいる研究は、諸商品の相対価値の変動の結果に関するものであって、その絶対価値の変動の結果に関するものではない」(Principles, p. 21, 前掲訳書、二五ページ)と主張している。したがって、リカードの主たる意図は、労働に基づく価値の量的関係に対してその労働の同質性の問題を彼なりに解決しておくということであったろう。しかし、彼がみずから「絶対価値の変動に関するものではない」と断りのことを述べていることは、反面からすれば——そして本文でも指摘したように——、単なる「価値の等級」としての処理以上の論点にふれざるをえなかったことでもあるように思われる。またすでに言及したように、相対価値の変動を支配する価値形成的労働が、ここでは「価値の等級」として編成されながら「絶対価値」として商品それ自体の価値変動——つまり「ある時」と「他の時」とのあいだの変動を支配する労働である点が強調される結果となっているのである。こうした関係

が、第三節では過去の蓄積された労働たる資本の「価値と耐久性の等しさ」における労働の社会編制のもとでの彼の労働価値論の展開へとつながっているものと考えるべきであろう。

(4) リカードにおける「絶対価値」と「不変の尺度」問題やまた絶対価値—相対価値の変化に対する関係で生ずる貨幣変動の原因による相対価値変化の問題（価値修正論）は、スラッファの研究によってすでに詳細に明らかにされている（The Works, Vol. I, Introduction, とりわけ p. 46-48, 前掲訳書、六二—六五ページ）。

(5) いうまでもなく、こうした問題の解決に立ち向うことになったのがマルクスである。そのさい、このリカードの修正論がマルクスとの関係でもった意味は、周知の「リカード体系の困難」(cf. Mehlert, MEW, Bd. 26-3, S. 177, 国民文庫(7)、三二七—三三三)を目度とするものであった。このリカード理論に対する彼の「困難」への評価はまたそれ自体で彼自身の困難を生ずる性格を含むものであった（この問題に関しては、時永淑「経済学史」改訂増補版、法政大学出版局、一九七一年、四一九—二〇〇ページ以下を参照されたい）。とはいえ、この点には、また同時に、後述するようにリカード自身においてスマイス投下労働価値論に対する一種の限定が介在しているわけである。そうした側面を考慮するならば——マルクスのヘーゲルとの関係についてひとまずおくとして——、学説史的にはすでにリカードにおいて商品経済的形態規定の解明の要請が提起されていたとしてよいのではないかと考えられる。

(6) スマイスが社会の経済的基礎過程—労働生産過程を独自の自然法的思想によるいわば安定的な市民社会的表象のうちに取り出し、示していたことは、他面では現実の具体的な商品経済的現象に対して比較的大雑把な理解を示すことにもなっているように思われる。つまり、「非常に素朴に……矛盾のなかで動揺している」(前出)というわけである。しかし、スマイスがそもそも三階級社会自体を彼の対象把握の中心点に明確に設定していないために、そしてそれにもかかわらずそうした関係を明らかにしようするためにいわば自然法的認識装置に依存して抽象したものが彼の市民社会であった。したがって、スマイスは、その理論的展開にかなりの不十分さを残したとしても、「動揺」をみずから確認することはなかったであろう。ところが、すでに明らかのように、三階級社会の労働の社会的編制を根本とし、その労働による相対価値決定を原理とするリカードにあっては、スマイス投下労働価値論への依存は明確な「困難」に逢着せざるをえなかった。したがって、前記の点(注5)とも関連することであるが、マルクスの次のような指摘が同時にリカードにおいて問題とされうることもなったのである。

「とはいえ、リカードの場合には、彼が次のようなことを直接に強調している二、三の箇所が見出される。すなわち、商品

に含まれている労働の量がその商品の価値の量の、その商品の価値の量的相違の内在的尺度であるのは、ただ労働が、いろいろな商品を等しくし、それらの単位、それらの実体、それらの価値の内的原因をなすものであるからにすぎない。彼が研究するのを怠ったのは、ただ、労働がこのようなものであるのは、どんな一定の形態においてであるか、ということだけである。」(Mehnerz, MEW. Bd. 26-3, S. 135, 国民文庫(7) 二四五頁以下)。

(7) 『原理』第一章第六節「不変の価値尺度について」では、この問題についての初版以来のいちおうの解答がなされている。(この論点に関しては、前記スラッファの「序文」で詳細に明らかにされている。)しかし、周知のように、彼は、その解答を「中間を形成しているのではなからうか？」とquestion mark(？)の叙述で与えているのであり、彼自身の納得を留保しているのである。

三 「遺稿」における絶対価値

スミスも同様であるが、リカードにおいても価値の本源の担い手たる労働は同時にそれに基づいて量的に価値の大きさを示す尺度たるものであった。彼らが価値の源泉たる労働とその尺度とを同一のものとして理解することになったのは、おそらく「富の実体としての労働一般の把握」と無縁ではないであろう。というのは、彼らは、とりわけスミスについてみれば、「労働一般が、しかもその社会的全姿態、つまり分業としての労働一般が、素材的富、または諸使用価値の唯一の源泉」だとされ、その結果、「自然的要素をまったく見すことによつて、単に社会的富の、つまり交換価値の領域に追ひこまれることになった」(Kritik, MEW, Bd. 13, S. 44, 岩波文庫版、六七ページ)からである。すなわち、A・スミスにとって「素材的富」つまり商品の使用価値という把握は成立不可能であったのであり、それに対応して、「社会的富」が商品の交換価値としてその本源の源泉と不可分に考えられたのである。そして、こうした理解はとうぜん彼の労働把握の特質と無関係ではありえないのであって、労働をいわば人

間の自然的本質とすることによって、もう一方の「素材的富」の源泉たる自然と対立し、その商品経済的富に占める位置を「見すごす」ことになったと考えられる。

以上のようなスミスの「富の源泉としての労働把握」の特質は、ほぼそのままリカードの「絶対価値」としての労働把握に影響を与えている。もちろん、すでに言及したように、リカードはそれを彼独自の仕方でも——つまり支配労働価値論批判のかたちで——理解し、再構成しようとした。端的には、「生きている労働」と過去の「蓄積された労働」との二面からである。しかし、すでにこの過去の「蓄積された労働」という理解そのものが、いわばスミスの徹底化であり、彼らの表象における労働のいっそう進められた理解であろう。リカードによるスミスの二面的価値規定の批判は、明らかなように、単にスミスの支配労働価値論を排除するということだけではなく、この点と同時に「ストックの蓄積」つまり資本との関係で与えられるべき基準を説くことと不可分な関係にあるというものであった。したがって、スミスにおいて「本源的購買貨幣」→投下労働価値論→労働の不変の価値尺度論として展開され、かつまたそうしたことにおいて成立しえている支配労働価値論を、その同様の脈絡において資本→過去の「蓄積された労働」としたのであるから、この関係は同時に彼をして不変の価値尺度論の提起とその解決とを必然的なものとしたのである。

ところで、リカードにおける右のような労働価値論→不変の価値尺度論の『原理』での説明は、ひとまず、一方ではいわゆる労働価値法則の修正論とそれに対応する第一章第六節での「外在的尺度」が金生産部門の固定・流動資本比率の中位的構成という想定による解決として説かれている。これは、すでに述べたように、問題の解決というよりもむしろその回避であった。もちろん、そうした回避は必然的なものであって、なおまた彼が「絶対価値」としてとらえた労働の性格を前提し、その理解に基づくものからすれば、この回避そのものはいわばリカード的解

決と言えなくはないのである。だが、事実上はリカード自身その解決に疑問を残したのである。周知の遺稿『絶対価値と交換価値』での考察がそれを示している。

おそらく、スマスが、いわば安定した自然法的人間把握とそれに密着する市民社会的表象とによってホモ・エコノミクスとしての個的人間像を確立し、社会の自然的法則つまり「自然的自由の制度」を展開しえたのに対し、リカード自身は必ずしもそうした安定した表象と直接には結びついていない。むしろ、それとの結びつきが直接には存在しない点に、彼のスマス批判が可能となったとも考えられる。だが、彼の労働把握の根源からすれば、リカードの意図はどうであれ、いわばその自然法的抽象にはかならないものであった。⁽¹⁾ それゆえ、結果を先き取りして言えは、例えば遺稿は、現実的にはスマスの自然法思想からの離脱において問題を見出しながら、理論的にはそれに根ざしていた彼の意識せざる苦闘の所産という性格をもつことになったのである。『原理』の処理とは幾分性質の異なる遺稿となったゆえんであろう。そこで、こうした点はやはり考慮されるべきであらうし、リカード理解のための或る側面を明らかにするものであろう。

リカードにとって、価値論がスマスの投下労働価値論を絶対的な根拠とされるべきであるという理解は生涯変わることとはなかった。例えば、先述の遺稿『絶対価値と交換価値』に関する諸断片のうちの一つ（「紙片a」とされているもの）で彼は「本来、すべての物は労働によって購買される」あるいは「価値の基準」が「労働の犠牲」(Absolute Value and Exchangeable Value, [A Rough Draft], Works, Vol. IV, p. 397. 玉野井芳郎訳『全集』Ⅳ、四七三ページ。なお、以下ではこの遺稿については、A Rough DraftとされているものはDraftまたは『草稿』、Later Version—UnfinishedとされているものはLater Versionまたは『最終稿』とのみ表記)であるとするとスマスの見地を依然として固持している。そして、こうした理解に基づいて、ここでは——理論的な展開の仕方としてはほぼ『原理』のそれ

と類似しているのであるが——、彼の「絶対価値」をより明確な抽象性によって開示しようとしている。それは、遺稿のうち『最終稿』によって明らかである。つまりこのものには見出しがあり、最初は「交換価値」次に「絶対価値」となっている。前者はごく短い概念的説明で終り、後者は、その稿の終りまでにわたっていて、絶対価値のいわば理論的性格を示し説得的展開をしようとしていることを物語っている。

遺稿で特徴的なことは、『原理』よりいっそう立ちいって、絶対価値について考察を加えていることである。しかもそのさい、彼は、その絶対価値が「不変の価値尺度」「完全な価値尺度」あるいは「絶対的価値尺度」等として、諸商品の相対価値の変動の根拠でありかつまたその尺度たる関係においていかなる性格にあるかを究明しているのである。この点については、例えば『最終稿』では次のような指摘がなされている。「もしすべての商品が、いかなる前払もなしに、労働のみによって生産され、そして一日のうちに市場にもたらされるならば、確かにわれわれは共通の価値尺度をもつであろう、それを生産するのに同一量の労働をつねに必要とする商品は、一フィートが長さの完全な尺度であったり、一ポンドが重さの完全な尺度であったりするように、完全な尺度であろう。」「*Later Version, op. cit., p. 403. 同前訳、四八一ページ*」ここに述べられていることは、前述のスマイスの見地の彼の確認であるが、しかし、それは、すでに彼のスマイス批判という問題意識の二重化においてなされているものである。すなわち、まずここでは、とうぜん、スマイスの「本源的購買貨幣」——不変の価値尺度そして支配労働価値論へ結ばれるものとしての考察ではなく、支配労働価値論に代わる相対価値の変動の「基準」が問題とされており、これは『原理』での彼の考察と同様である。だが、さらに右の叙述では、事実上彼のいわば新たな理解が表明されているのである。

彼は、すでに見たように、「原理」では絶対価値をその根拠となる労働の質の差異の等級編成や時間的前後関係

での価値変化の指標として言及するにとどまっていた。価値修正論的展開ではいわばその程度でそれを処理しえたのである。ところが、遺稿では絶対価値それ自身について明確な抽象的輪郭を与えようとしていると思われる。あるいは言い換えれば、ここでは絶対価値と彼が理解したものそれ自身が価値論としてどの程度の妥当性の範囲にあるものかを明確化し限定しようとしているのではないかと思われるのである。彼は、先きの文章に続いて次のようにも言っている。「あるいはまた、もしすべての商品が一年間それらに使用された労働によって生産されるならば、同一量の労働をつねに必要な商品はまだ完全な尺度であろう。」(Later Version, *ibid.*) こうしたリカードの叙述からみれば、彼は、絶対価値をいわば表現可能な相対価値との関係で、あるいは絶対価値の変動を価値尺度を通じて正確な相対価値の変動として表わしうる関係で、理論的に規定しうるその抽象的本質として考察しているように思われる。

すなわち、想定された「前払いなしに、労働のみによって生産され」という生産の抽象的次元とは、簡単に言えば、人間の自然に対する労働行為に他ならないのであって、リカードは、スミスに倣ってこれを商品経済的に社会化された価値形成的労働行為として把握したために、このように述べているのである。もちろん、この場合、まったくスミス同様の表象としてつまり人間に本来的な「交換性向」とかして理解されているわけではない。「すべての商品」としての商品世界に対して自然と労働との関係をそのように抽象したものである。この点はまた、「一日のうち」とか「一年間」とかの想定がきわめて非現実的にあるいは抽象的になされていることによっても伺い知りうることであろう。もちろん、こうした期間あるいは時間的経過については、彼はむしろ重要な問題をもつものとして置いている。遺稿では、絶対価値と区別されるべき相対価値に関してその点を考察しているのである。このことについては、例えば『草稿』において、「……問題の難しさは、前払いが行なわれる時間の諸条件が非常に異なるた

めに、完全な尺度となるような一商品を発見するのは不可能だということである」(Draft, op. cit., p. 370. 同前訳、四四五ページ)と述べていることでも明らかであろう。⁽³⁾

このような「時間」に対するリカードの理解については、すぐあとで改めてふれるが、ただその「難しさ」を難しさとしている点は、明確にしておかなければならぬだろう。その点は、前述のような彼の労働価値論の性格に根ざしているものと言える。彼は、すでにスミスの「裂け目」の克服を課題としていたのであるから、労働過程と生産過程とをただもっぱら「すべての商品を労働のみによって生産」し、かつまたその所産たる生産物に対し「私の労働」も「他人の労働」も同一の質量たりうる労働として存在するようなスミスの商業社会を想定するわけにはいかなかった。もちろん、この商業社会といわばその現実の外枠としての三階級社会とを区分することも問題になりえない。自明のことであり、すでに言及したことであるが、リカードはその商業社会に三階級社会を割りこませたのであって、その意味ではとりわけ分業論に基づくスミスの労働生産過程論を排除することにならざるをえなかった。このような彼の地位から生ずることは、生産的編制に対する別の理解と、それに対応するスミス労働価値論(投下労働価値論)の理論的処理であろう。前記引用文からすれば、「一日」「一年」とかの抽象的事例によるいわば「絶対価値」の抽象的規定がそれである。しかし、この場合、彼がスミスの労働価値論の本質をも排除しようとしたわけではない。むしろ、それ自身を不変の前提として考察している。したがって、彼の困難は、古典派としては当然であるが、生ずるべくして生じたものと言える。

スミスの労働価値論を排除せず、困難を処理するものとしてリカードが事実上行なった理論的処理は、前述のように、それをいわばきわめて抽象的な次元に限定することであった。あるいは比喩的に言えば、そうした次元に押え込むことであった。「……諸商品がまさしくひきつづいて同じ方法で生産されている間は——小エビは小エビと

同じ生産条件のもとで生産されるすべての物に対して、服地は服地と同じ条件のもとで生産されるすべての商品に對して、またブドウ酒はブドウ酒と同じ生産条件のもとで生産されるすべての商品に對して、すぐれた価値尺度となるであろう、しかし、小エビは、服地やブドウ酒に對して正確な価値尺度とはなりにくいであろう……。」「(Draft, op. cit., p. 369. 同前訳、四四四ページ) リカードのスマス批判の脈絡によって、価値形成的労働をそれ自体としてつまり絶対価値としていわば純化し取り出せば、実はそれはそのもの自体によって直接に社会的編制へと結びつけられるものではないということになる。それ自身として価値を形成しながら、価値としての社会的關係——リカード的には「すぐれた価値尺度」——を成立させえないというわけである。

右のようなリカードの観点に即すれば、古典派がそして彼自身が商品価値の源泉としてみずからの原理的展開の軸としたものが、実はそれ自体では、諸商品の価値の社会的關係を媒介しうるものではないということになる。逆に言えば、商品經濟の運動では現実的にも理論的にも「すぐれた価値尺度」を要請しそのもののもとで価値の社会的基準が確定されていながら、価値形成的労働それ自体では、そうした確定を実現しえないというわけである。むしろ、彼がここで取り出した「本源的購買貨幣」としての労働は、直接には「小エビ」「ブドウ酒」「服地」を生産する労働として存在するのであり、そのものが直接に社会的生産としての定在を獲得しえているものではないのである。直接的にはそれは、単に自然に對する労働の關係にすぎない。すなわち、「すぐれた価値尺度」という社会的媒介とは切斷されている。先きの引用文のすぐあとで、彼は、すでに『最終稿』から引用したものとほぼ同様の記述をしている。すなわち、「すべての商品がまさしく同じ条件のもとで生産されるなら——つまり、すべての商品がその生産に前払いなしにただ労働だけを必要とするなら、あるいは……正確に同じ期間に市場にもたらされるなら……よい価値尺度たるものを定めるのに、なんの困難もないと思われる」(Draft, op. cit., p. 368. 同前訳、四四

三ページ)と。「本源的購買貨幣」としての価値形成的労働と諸商品の価値関係との無媒介的在り方に即すれば、このような想定をなさざるをえないというわけである。

すでに述べたように、リカードは遺稿においてもスミス労働価値論(投下労働価値論)の見地を放棄したわけではない。あるいはその見地を固持しているために苦闘しているとも言いうる。それゆえ、そうした見地の固持という彼の理論的根拠に即してみるならば、彼の「すぐれた」、「よい価値尺度」の成立条件のもとでの労働は、実は本来的にそうした尺度そのものの必要性を必然化するような事情にはないのである。そのような社会的媒介なしに、そもそも homogeneous な労働としてすでに「私の労働」も「他人の労働」も一様に等置されるものに過ぎない。つまり、スミスの価値論の世界はまさにこうしたものであって、労働過程としての人間と自然との関係の商品経済的社会的関係への等置関係から想定されるかの抽象的世界に過ぎないのである。

「そこで、次のように考えられる。すなわち、一日、一カ月、一カ年または何カ年使用されようと、同一量の労働によっていつも生産される商品なら、仮りに諸商品が賃銀と利潤とに分割される比率がいつも同じだとすると、完全な価値尺度であるが、しかし、その比率は尺度として使用されうる商品の生産される時間がより短いか長いかによって異なるので、こうした比率の変動から生ずる諸商品の變動についての完全な尺度というものはありえないのである。」(Later Version, op. cit., p. 404, 同前訳、四八二ページ)いうまでもなく、本質的にはスミス労働価値論に立脚しているリカードにおいて、労働の本源的状态に対する資本関係の登場についてまったく新たな見地が形成されうることはありえない。「価値をもつすべての商品は、直接労働か、または直接労働と蓄積された労働との結合かのどちらかの所産である」(Draft, op. cit., p. 379, 同前訳、四五四ページ)ということにしかないのである。とはいえ、このことは、確かに疑いえないとしても、スミスの労働価値論の根元の彼による抽象化作業がそこに介

在して来る関係にあることも無視はできないであろう。⁽⁵⁾

それゆえ、彼の理論的模索において資本がおのずと登場するということになっていても、彼の考察の理論的ディメンションでは、やはり事柄は別の内容を含まざるをえない仕方になってるのである。それは、前述の自然―労働からする抽象的世界からさらに進んだものとも言いうるが、いわばその抽象的世界に対し資本が登場するその即自的な関係ともいえるディメンションである。前記引用文によれば、「同一労働によっていつも生産され」、「賃銀と利潤とに分割される比率がいつも同じ」諸商品の生産ということである。リカードは、前記引用文からも明らかのように、こうした理論的想定はそうしたものとして成立しうる余地をほとんどもぢえない、というような調子で叙述している。だが、彼においては、たとえそうだとしても、そのような考え方あるいは理論的抽象をひとまず想定しなければならなかったはずである。それは、一方では彼の払拭しえぬ根強い観念——これもスミスのなものであるが——のためであろう。すなわち、「もしすべての商品が市場にもたらされる状態となるまでに一年間を必要とし、またその期間中に商品を生産するために人間の労働を継続的に必要とするなら、商品はその生産に充用された人間の数にしたがって価値が定まるだろう。……この場合もまた同一量の労働をいつも要求し続けるような商品は正確な尺度であろう。実際それは不変であろう……実際これが完全な尺度に最も近いものとして私の提案している尺度なのである」(Dray, op. cit., p. 364, 同前訳、四三八―三九ページ)とする「不変の価値尺度」に対する執着である。そしてまた他方では、この点と無縁ではありえないのだが、彼が最も抽象的な次元に押え込んだ自然―労働の関係に対する理解によるものと言えよう。すなわち、前述のように、すでに彼にあってはその次元が直接的には社会的媒介を欠如するものとして認められねばならなかったし、しかもそうしたものとして価値形成的労働の本源的状態とすべきものでもあった。そこで、こうした理解を資本と労働との関係に対して、そうした次元として再度

確認するための手続きが必要となるわけであり、したがってそれは生産条件がどう異なろうとも、つまり「一日、一カ月、一カ年または何カ年」生産に使用されようと、とする条件のもとでの前述の想定になるわけであって、これは結局彼の「絶対価値」としての根本的抽象次元と「相対価値」の変動の具体的媒介を要する生産条件の差異の次元との相違を明確化することにはかならなかつたのである。

したがって、こうした観点からすれば、リカードは彼の「完全な価値尺度」―不変の価値尺度への理解をとりわけ「絶対価値」との関係で次第に消極化していったと考えられるのである。もちろん、彼は「草稿」では明らかに、例えば「われわれには絶対不変の価値尺度がないにしても、それならそれにいちばん近いものはなんであろうか?」(Draft, op. cit., p. 381. 同前訳、四五六ページ)とか、「完全な一般的価値尺度となるようなどんな商品も、発見したりあるいは想像したりすることさえも依然としてきわめて困難なのである」(Draft, op. cit., p. 397. 同前訳、四七四ページ)と述べており、そうした傾向を明瞭にしてはいない。しかし、他方ではすでに考察したコンテキストのうえで、「本来 (in nature) 完全な価値尺度というようなものはない」(Later Version, op. cit., p. 404. 同前訳、四八二ページ)としているのであって、こうした断定が彼の遺稿における「絶対価値」の考察と無縁ではありえないと言いうるであらう。

さて、以上のごとき考察を行ない、最終的に問題とされているのは、生産条件を異にする各資本の現実的な存在とそれに対応する価値尺度の性格ということになる。その際、遺稿において特徴的なことは、すでに指摘されているように、蓄積された労働としての資本を「前払」とその回収との関係すなわちもっぱら回転期間としての時間的運動に絞っていることである。こうした見地は、『原理』におけるリカードの資本把握―固定・流動資本としてのそれ―の徹底化とも言いうるが、いずれにしろ、遺稿に関するかぎりでは彼が資本による商品経済としての社

会編成の現実的挺子を「時間」的運動に見出し示していることを示している。この点は、おそらく彼が「絶対価値」を労働過程に——いうまでもなく、価値形成的労働による自然との関係としての理解に——限定したことに対応している。つまり、そうした限定は、同時に個々の資本の生産過程に多かれ少なかれ関係づけられる固定・流動の資本区分からする資本の社会編制のもとにある労働への契機の考慮を消極的なものとなし、その反面として資本の時間的運動が純化されるという結果となったものであろう。

したがって、リカードのこのような資本把握あるいは資本の性格の抽象化は、それ自体としては資本の運動の本質的一面をとらえているとか、または労働価値論を費用価格論へと解消する要因をなすとかの理解を生じさせるものであろう。だが、右のような「絶対価値」との関係を考慮するならば、彼の労働価値論の——つまり価値形成的労働の理解の——究明の所産とされるべきものである。それゆえ、この資本は、商品価値の源泉が価値形成的労働とされながら、この労働がそれ自体としては価値としての社会的媒介を欠如しているということから要請された性格なのであって、その範囲内で理解されるものにすぎない。その点は、彼の現実的な価値尺度の選択が「原理」でのそれと大差のない「中間物」(Later Version, op. cit., p. 405. 同前訳、四八三ページ)に結果していることによっても示されている。つまり、彼がこうした処理に終ったのは、究極的には彼のスミス労働価値論への依存によるのであり、労働過程の商品経済的絶対化によっては、資本家的商品経済の要請する社会的媒介の本質的性格を取り出すことが不可能であることを示すことになつていたのである。

右のようないわば当然の結果に帰着したとはいえ、リカードは、スミスとは異なり、諸商品の価値関係の社会的媒介の自立的要請を問題とする地点に立つこととなつたと思われる。もちろん、結果的にはあるが、こうしたリカードの問題は、彼自身においてその解決を可能としうるような性格にはない。その解決には、彼のよつてたつた

「絶対価値」の根本的な再検討が、したがってスミス投下労働価値論の根本的な批判が行なわれなければならないか
つてゆえんなのである。

(1) 中野正教授は、かつて著書『価値形態論』において、次のような注目すべき見解を示された。すなわち、「スミスの交換価値の概念に想定されている条件は、『かの対象』すなわちそういう客体的な「人間の生存の環境ミヤドコロをなす客体としての自然引用者」有用性をもつ物・の占有 Possession であり、占有された有用物⇨生活資料相互の交換関係である。ここからとりだせるのは、たんなる客体としての有用な自然と、相互の交換を予想するところの生活資料獲得の仕方との、つまり自然にはたらきかけて客体的な有用性を生活資料として主体化する一定様式との区別にすぎない。／……リカードオはこの点を明確にする。』そこで「[素材としての]有用性は交換価値にとつて絶対的に欠くことのできないものであるが、その尺度ではな。もしもある商品が、どの点からも有用でないならば……それは交換価値を欠くであろう。……つまり占有によつてとらえられた素材の有用性は、ここでは文字どおり『交換価値の素材的前提』とされているわけである。しかしこれによつて、さきの意味で使用価値を捨象(分離)したスミスと異なつたことがいわれているわけではない。むしろスミスにおける使用価値の捨象が含意していることをとりだして規定したものにすぎない。……/スミス⇨リカードオをつうじて、このように使用価値を、生産物とそうでないものと共通な、たんなる客体物の有用性⇨素材的要素としてとらえる視点は、それらに對置される交換価値を、主体的な生産活動に關連せしめる見地を端的に提示するものであった。」(『価値形態論』、日本評論社、一九五八年、七七一七八ページ、斜線は改行を示す。)

右の教授の見解は、重要であろう。ただ幾分私見をつけ加えるならば、「分離」された他方の交換価値の実体としての労働そのものは、その包摂装置としては明らかにリカードの場合にスミスとは異ならざるをえなかつた。そしてその際に、リカードでは、資本の固定・流動の区別、結局その回収の時間的差異として「素材の有用性」の環境を無視するわけにはいかないことになっていると思われる。

(2) この論文では、直接にはリカードの絶対価値—不変の尺度—労働価値法則の修正論の論証構造を「原理」の各版や遺稿等におけるその変化、性格などとして考察することを問題としていない。だが、前述のスラッファの「序文」において、「この概念〔絶対価値〕は『原理』でははじめ(初版で)『絶対価値』として現われ、のちに(第三版で)『実質価値』として現

われているが、……そして「絶対価値と交換価値」についての彼の最終論文のなかでいっそう明確な形をとっている」(Principles, Introduction, Works, Vol. I, p. 46. 前掲訳書、六一―六三ページ)と述べられていることは重要である。また、彼はそこで「価値についての彼の最後の論文が初版の主張と同様なそれに立ち戻っている」(op. cit., p. 47. 同前訳、六五―六六ページ)例を取り出しでもおり、この点はやはり注目すべきであろう。こうした事情は、おそらく、リカードが彼の受容したスマス投下労働価値論を絶対価値として彼なりに考察し尽くそうとしたことにあるのではないかと思われる。

(3) リカードが「価値の修正要因」を、最終的に「時間だけに一元化」した点に関する考察については、桜井毅「生産価格の理論」(東京大学出版会、一九六八年)、四六ページ以下を参照されたい。なお、桜井教授はそこで、リカードにおいて「その価値論の修正が、したがって、結局、労働価値説の放棄がみちびかれることになった」(同前書、五二ページ)とされ、リカードの修正要因の時間への一元化が、他方で彼による労働価値論の放棄を伴なっている、という関係にあるかのような印象を受ける指摘をされている。もしそうだとすれば、この点に関しては、必ずしもリカードに即しているものとは思われない。本文でも述べているように、リカードは労働価値論を、したがってスマスの投下労働価値論につながる彼の「絶対価値」を最後まで放棄しはしなかった。ただ、それをどう限定するか、ということが彼の問題であったにすぎないのではないかと思われる。

(4) 「諸国民の富」第一篇第一章から第五章までのスマスの商業社会・市民社会の設定、展開は、スマスにおける労働生産過程の抽象と解されるべき性格である。この点については詳しくは、拙稿前出論文を参照されたい。

(5) 「もしすべての商品が一日だけ使用される労働によって生産されるならば、利潤のようなものは存在しえない……すでにみたように、労働の価値に変動はないが、諸商品の価値は労働生産性の高低にしたがって変動するであろう。」

「しかしながら、一年または二年を経たあとに市場にもたらされる諸商品に関しては、実は、共同所有者である二つの階級が存在する。一方の階級は、商品の生産を助けるために労働だけを提供し……他方の階級は、資本という形で必要な前払いを行ない、そして同じ源泉から報償を受け取るにちがいない。」(Duff, op. cit., p. 365. 同前訳、四三九―四四〇ページ)

リカードが彼の原理的考察において基本的に設定している三階級社会では、右の引用文のうち前者のような場合は一般的なものとはなりえないのであろう。だが、後者の場合も、ただそれ自体が独立したものとして考えられているわけではない。この点は、他面で彼の剰余価値の根拠の把握の問題でもありかつその点ではすでに明らかなことである。だが、そうし

たことを含めても、彼にとっては、スミス投下労働価値論への依存とその限定との相剋が究極的な問題となっていたと言えよう。

四 結 語

リカードがスミスの二面的価値規定を批判し、投下労働価値論に基づいて、三階級社会の統一的原理的考察を果たそうとしたとき、彼はマルクスの批判とは——つまりスミスの「裂け目」の無視という批判とは——別の意味で、確かにそれに無自覚であった。いうまでもなく、スミスのその価値規定は、彼の商業社会と三階級社会とを彼なりに統一的に明らかにするためのものであった。したがって、スミスへの批判は、本来その二面的価値規定そのもののつまり両者の統一的関連において批判されるべきものであった。

ところが、リカードにはそうした視点は成立しえておらず、ただ一方だけを継承し、彼の想定した社会的関係の統一的解明の基礎とした。その結果、彼は、周知のように、その基礎と社会的関係とのあいだに生じた矛盾の処理に困難を背負いこむこととなった。いわば、その無自覚のために逆に「裂け目」に直面することになってしまったのである。この点は、一般的に例えば彼の価値と生産価格との関連という問題として提示すれば、一方に依存すれば他方を規定しえず、他方に依存すれば一方の処理が困難となるというような関係となる。

しかし、リカードは、そうした矛盾の処理可能方法を彼なりに追求したのであり、結局その解決として、スミス投下労働価値論をきわめて抽象的な次元として限定するというものであった。このことは、あるいはリカードの位置からして、彼の経済学にとって当初からごく当然の課題であったと言えるのであろう。なぜなら、いわばイギリス的自然法思想の極地の一所産とも考えられるスミス『諸国民の富』就中そのいわゆる市民社会的把握を越えるべ

き位置に立っていたリカードにとっては、すでにそうしたスミスの表象のなんらかの仕方での克服が課せられていたはずだからである。

右のような関連において、スミスの世界の究極の土台が彼の「労働こそは、本源的購買貨幣であった」という投下労働価値論であるとするなら、リカードの課題も最終的にはその価値論に対するなんらかの克服が問われることになるだろうをえなかった。すでに検討したことからすれば、彼はその問題の一定の程度の解決を与えたわけである。そして、そのかぎりでは、経済学においてスミスの表象を押え込むことができた。だが、それは、彼においてはあくまでも部分的作業の域を出なかったのである。根本的には、スミスのなものと結びつけていた。

とはいえ、経済学の理論それ自体の流れでみれば、右のようなリカードの作業は、やはりマルクスを予見しうるものとなりつつあるのであって、事実、マルクス自身の経済学体系化作業のなかで占めた彼の理論の位置はきわめて大きいものであった。もちろん、マルクスの場合には、直接にはヘーゲルを媒介とする批判的視点の成立という独自の性格が重要である。しかし、すでに本文中で言及したようなマルクス自身における問題を考慮するならば、その批判的視点とリカードの到達点とは彼の理論の内部でさらに検討されなければならない性格を帯びているとすべきであるように思われるのである。